

それからですね、イギリス全体の日本学の実態を述べますと、ここは SOAS の他にも50以上の大学、ケンブリッジ、シェフィールド、その他たくさんある大学の教師たちが、毎年一回全員が会員になっている訳じゃありませんけど、British Association of Japanese Studies (BAJS) に入っている人たちも毎年の学会に出てもらって発表しています。それからこの BAJS という横断的な、学際的な組織なんですけど、BAJS というのは大体三つの機能を果たしている機関として考えていただきたいと思います。

その一つは、今言いましたところの British Association Japanese Studies Conference、それは毎年4月にイギリスのどこかの大学で開催するもので、今年の四月には小風先生に来ていただいて、発表していただいたんですけど、その学会はさまざまなパネルがありまして、今年は歴史のパネルですとか、応用言語学のパネルもあれば文学のパネルもあります。

それからもう一つの BAJS の機能は事業としまして、ジャパン・フォーラム (Japan Forum) という学術雑誌の編集事業があります。Japan Forum という学術雑誌は、イギリスの大学の日本学の先生たちが編集委員会を組んで運営しているわけなんで、どうもこの Japan Forum に投稿される論文は、その殆どが社会科学的なものが多くて、今年の場合歴史の論文は案外少ない、文学も少ない。で、20世紀、21世紀の日本の研究をとりあげた論文が過半数を占めているのが Japan Forum の現状で、それはやはりイギリスにおける日本学の現状を反映させたものだと思います。

それからもう一つの規模の小さい事業といたしますか、機能なんですけど、こういうのがあります。Ian Morris 賞 と言いまして、Ian Morris のことご存じの方がいるかも知れませんがイギリスの、数年前に亡くなったんですけど、平安時代の文化から21世紀の右翼団体の研究まで、かなり幅の広いしかも教養のある方で、その方の研究を記念するために Ian Morris 賞というのをやっています。それは、マスター論文で、全国の日本関係のマスター論文の優秀なものを我々が抜き出して賞を授与する仕事があります。

ですから、その三つの機能を果たすわけなんで、第一その学会、それから Japan Forum という学術雑誌、それから第三番目は Ian Morris 賞です。まあ、以上はイギリスにおける日本学、日本語学界の一環を申し上げました。以上です。

## チェコにおける日本学総覧

ダビッド・ラブス

現在のチェコで行われる日本研究は、おおよそ四分野に分けることができる。大学レベル研究、大学以外の高等学校と国立外国語学校での日本語講座、博物館や美術館における研究と展覧会活動と科学アカデミーの付属機関としての東洋研究所における日本研究なのです。

1 大学レベルの研究と言っても、現時点では、日本学科が独立している Olomouc (オロモウツ) 市の Palacký (パラツキー) 大学とプラハのカレル大学と、ブルノ市にある、言語学学科に付属している Masaryk (マサリク) 大学と、Plzen 市 (ピルゼン) の西ボヘミア大学、経済学部の日経経済センター

の日本学科（3学期カリキュラム）、という細分化もできます。パラツキー大学の日本学科は、1992年に新しく設立され、一年おき新規一年生を受け入れる学科で日本語、日本文学、日本史などの課程があり、日本人の講師も日本語授業を担当されております。学生数は、全部で40人に及んでいません。教材も多少作成されています。

プラハのカレル大学の日本学は、1946年に創立され、チェコでの伝統は、一番長い学科です。当初の日本学科長、全学科の副学科長を兼ねた Hilská 教授は、戦前にも、日本語教科書、その外にも何冊の書籍を出していました。日本学科の社会主義時代の最盛期と言ってもいい時代だったのは、1960年代でした。当時と一番密接に結びついているのは、日本文学、日本思想の研究者と翻訳者の Novák 氏で、後程亡命して、世界で名声を築いた学者を育てた先生でした。日本語文法、日本文学など、現在でも使われる教材の何冊か作成しました。現在は、毎年新一年生を受け入れる制度を採用していて、60人以上の学生で、東亜研究所では、最大の学科になっています。日本文学、日本語、日本歴史、新しく日本社会、それぞれの分野の担当者がいて、博士課程もあります。今年の二月に、日本政府の ODA 助成プログラムで、LL 機材が寄付されて、日本語だけでなく、あらゆる分野の授業が、より効果的なレベル実施できるようになっています。日本大学との学生交換も益々活発になっていくし、平均で2-3年に一回学術会議も行います。教材の作成も最近増えて、『会話の日本語』とか、『漢チェコ語辞典』とか、『独学の日本語のノート』が発行されました。国際交流基金の派遣で教える日本人講師も相ついでいて、客員教授も定期的に博士課程の指導をされます。教授はいませんが、一人の教員（Švarcová 博士）が助教授号を近いうちにとる見込みです。

2 大学以外の教育機関は、先ず国立外国語学校を挙げなければなりませんが、そこでもプラハに長期的に滞在している日本人講師も教えています。国際交流基金の様々な助成プログラムにも参加しており、公向けの機関としては、伝統が長く、レベルもかなり高いと見られます。最近では、プラハだけでなく、日本語講座が成立する高等学校、予備校の形を取る日本語講座などの施設も増加していますし、そこで主にカレル大学の卒業生が教えたりしています。

3 独特な分野で、伝統と成績を保持してきたのは、豊富な収集物を保管する国民ギャラリーとナープルステック博物館です。今世紀の前半には、日本に旅行して、趣味であらゆるものを買集めていた収集家やいわゆる日本ファンの旅行者が日本の美術品を蓄積して、多くの場合、その収集物をどちらかの博物館に寄付しました。その中で、ヨーロッパ的に有名なものは、国民ギャラリーとナープルステック博物館に分けられている Hloucha（ホロウハ）コレクションです。数多くの展覧会、カタログ作成、学術記事、美術品目録作成など、いろいろと活躍しています。

4 最後になったのは、科学アカデミーの東洋研究所です。実は、チェコにおける学術レベルの日本研究の伝統は、今世紀の20年代にさかのぼるもので、戦前創立されたこの研究所に発生したと言ってもいいと思います。1990年代に入ってからでは、他の施設と同様に再編成されて、若手学者が入って、研究しています。研究所図書館に収まっている何千冊もの学術図書が日本語で書かれた資料や文献としては、かなり重要で、そのおかげで、東洋研究所は、日本研究の「要地」となっています。